

L・P・ハートリーのヴェネツィア（一）

——ヴェネツィアのハートリー

鳥 越 輝 昭

はじめに

L・P・ハートリー (L. P. Hartley, 1895-1972) といっても、今の日本では知る人のあまりいない作家であろう。名を知る人も、おそらくは怪奇物の短編作家として記憶を止めているのではないか。

ハートリーの怪奇短編小説は、「ポドロ島 Podolo」が、かつて江戸川乱歩編『世界大ロマン全集 第二八巻、怪奇小説傑作集』（東京創元社、1958、宇野利康訳）の巻頭に収録されて以来、一ダースほどの作品が邦訳された。そのうちの二、三点は、現在流通している選集にも入っている。それに、今は絶版だが、集英社の『世界短編文学全集2、イギリス文学二〇世紀』（1962）にも怪奇的短編「W・S」が収録されていた。ハートリーは本邦でも、怪奇的傾向の短編作家として、小さいながら一角を占めてきたようである。

しかし、長編小説作家としてのハートリーについては、そうでなかった。ハートリーは、生涯に十七冊の長編小説を出版した作家であるのに対して、短編小説は、分厚いものながら、一冊にまとめられるほどの数しか書いてい

ない。単純に量的に見ても、本領は長編小説にあったと見るべきだろう。また、質の点でも、ハートリー研究家ビーンのように、怪奇的短編は「副業的仕事」に過ぎず、シリアスな作家としての本領は長編にある、と言い切った人もある (Peter Bien, *L. P. Hartley, Pennsylvania: Pennsylvania State U. P.*, 1963)。ところが、長編作家としてのハートリーは、本邦でほとんど紹介がなされなかった。唯一の例外として、五十年前と三十数年前に、代表的長編のひとつ『*The Go-Between*』が二度、邦訳出版されただけである (落沢忠枝訳『恋を覗く少年』1955、森中昌彦訳『恋』1971)。もうひとつの代表的長編『*Eustace and Hilda*』三部作は、これまで邦訳されなかった。ハートリーに関する本邦でのこれまでの紹介のされ方は、いびつであったといえるだろう。また、評伝も研究書も、これまで日本では出版されなかったようである。齋藤勇『イギリス文学史』(第五版、研究社1974)も、ハートリーにはまったく言及しなかった。アカデミックな研究対象にも、あまりならなかったといえそうである。

日本で出版されている文学事典の記述にも、少し問題があるように思う。『英米文学事典』(研究社、第三版、1985)、『新潮世界文学事典』(新潮社、増補改訂版、1990)、『集英社世界文学事典』(集英社、2002)、『イギリス文学辞典』(研究社、2004)には、いずれもハートリーに関する短い紹介がある。特に集英社版の記述は、短いながら充実したものである。しかし、どの事典の記述にも、この作家とイタリアの都市ヴェネツィアに関する言及が全くない。だが、ハートリーは、壮年期の十数年間、毎年、一年の半分をヴェネツィアで暮らした人である。事実上の処女作『*Simonetta Perkins*』(1925)もヴェネツィアを舞台にする中編小説であったし、代表作『*Eustace and Hilda*』三部作の第三部『*Eustace and Hilda*』(1947)はほぼ全体がヴェネツィアを舞台にしており、『ポドロ島』もふくめて、短編数点もヴェネツィアに材を採るものであった。ハートリーの妹も、兄の伝記を書こうとしていたエ

イドリアン・ライトに、「みんなはレズリーが英国フェンランド地方の作家だったというでしょうが、それとおなじくらいヴェネツィアの作家でもあったのよ」と語ったところである (Adrian Wright, *Foreign Country: The Life of L. P. Hartley*, London: Andre Deutch, 1966, p. 274)。そういう意味では、文学事典にも、ヴェネツィアに深く関わった作家であった、という一句はあってもよいだろう。

ところで、博識の英文学者、富士川英夫は『新・東西文学論』(みすず書房、2003, p. 170)のなかで、現在も英国でよく読まれている作品としてハートリーの *The Go-Between* にふれているが、ハートリーの英語圏での評判や読まれ方は、どのようなものだったか。この拙文の執筆時点で、ハートリーの作品は、*Eustace and Hilda* 三部作と *The Go-Between* が流通しており、近々 *Simonetta Perkins* が復刊される模様である。 *The Hireling* にはカセット朗読版がある。これらのほかに、ライトによる伝記(前掲書)一冊も流通している。たしかに、ハートリーの一部の作品は読み継がれ、著者への関心も、わずかながら、あるということだろう。

英語圏のアカデミズムや教育界でのハートリーの評価を瞥見するために、一冊本の英文学史を覗いてみよう。ハートリー死去の年(一九七二年)に出版された *The Concise Cambridge English Literature* (Cambridge: Cambridge U. P., 1972, 邦題『ケンブリッジ版イギリス文学史』)の、現代を扱った章で、ハートリーは、「少年期や青年期をまことに鋭く描いた小説家たち」のひとりとして、J・D・サリンジャーなどと並べて名を挙げられていた (p. 899)。この時点でのハートリーの評価は、かならずしも低くなかったようである。だが、死後十五年、一九八七年出版の Pat Rogers, ed. *The Oxford Illustrated History of English Literature* (Oxford: Oxford U. P., 1987) では、ハートリーへの言及がまったくない。一方、わりあい新しい二〇〇〇年出版の Michael

Alexander, *A History of English Literature* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2000) にはハートリーへの言及があるのだが、このなかでは、「これら〔アントニー・パウエルの二つの小説〕は『Eustace and Hilda』と『The Go-Between』の著者L・P・ハートリーによる書評で高く評価された」と書かれている (p. 351)。つまり、ハートリーは、第一義的には書評家として紹介されているのである。かつて、ハートリー評伝の著者ジョーンズは、「ハートリーは広範な人気を博したことの一度もなかった小説家だが、熱心な読者たちが、英国や米国各地の大小の図書館で、いつも〈発見〉し続ける作家」だと書いた (Edward T. Jones, *L. P. Hartley*, Boston: Twayne Publishers, 1978, p. 11)。現在の英語圏での状態もそういうものであるのかもしれない。

さて、拙稿では、三回に分けて、この作家とヴェネツィアとの関連を三様に捉えてみたい。第一回は、この人物の生涯のなかでこの都市が果たした役割、第二回は、この作家が作品のなかでこの都市をどのように描いているか、第三回は、この作家の文学活動のなかでヴェネツィアがどういう意義を持ったのかについてである。回を追うに従って、ハートリーが、第一に、単に怪奇的短編の書き手ではなかったこと、第二に、ヴェネツィアに深く関わって、そこに重要な題材を採った作家であること、第三に、ヴェネツィアとの関わり方と題材の取り上げ方の特徴も、おのずと明らかになるであろう。

今回の拙文だけについていえば、これまで、邦語によるやや詳しい伝記はなかったし、ヴェネツィアとの関わりについて述べた伝記もなかったのであるから、それだけからいっても、拙文に若干の意義はあるだろうと考えている。

一 略伝

L・P・ハートリーの略歴を述べておこう。以下、ハートリーの伝記的事実については、主に、ハートリーに関する唯一の詳細な伝記 *Adrian Wright, Foreign Country: The Life of L. P. Hartley*. London: André Deutsch, 1966 に依拠する。これは私信をたんねんに利用した労作であり、しかもこの伝記の完成後に、親族の手にあつた私信は処分されたそうであるから、伝記的事実の多くについては、この本に頼るしかないのである。なお、このハートリー伝にもとづく事実については、煩瑣になるので、原則として引証を示さないことにする。

レズリー・ポウルズ・ハートリー (Leslie Poles Hartley) は一八九五年十二月にワイトルシー (Whittlesey) に生まれ、一九七二年十二月、ロンドンで死去した。死因は心臓病である。享年七十七歳であった。

レズリーの生地ワイトルシーは、ケンブリッジ州の古都ピーターバラからおよそ六マイル離れた町である。十九世紀末年 (1891) の統計では、ワイトルシーの人口は、周辺の沼沢地や村を併せて六、三四五人であった。この地方は、ロンドン市場向けの小麦、エンドウ豆、ジャガイモを産し、また日干し煉瓦を産する場所であった。

レズリーの父、ハリー・バーク・ハートリー (Harry Bark Hartley) は、事務弁護士であったが、加えて事業の才があつた。ハリーは、一八九八年、地元の煉瓦会社の重役になったが、この会社は、窯焼きに適した良質の粘土の発見と、折からの煉瓦需要とにより発展した。息子レズリーが、上層中産階級の子弟として生育できたのは、父が煉瓦事業で成功したおかげである。成功のほどは、途中からハートリー一家の住まった住居に見ることができ、一九〇八年、一家は引越しをしたが、越した先は、ピーターバラ市の町外れにある、フレトン・タワー

(Fletton Tower) という名の邸宅である。屋敷はゴシック様式の小型の城といえそうな建物で、およそ九エーカーの広い土地がついていた。

父ハリー・ハートリーは、宗教的にはメソジスト派のキリスト教を信仰し、政治的には自由党支持者であった。ハリーは読書家で、少年レズリーの本に関する知識は、父との会話から得たものが多かった。ハリーは判断力に絶対の自信を持っているひとであった。母ベシー (Bessie) は、それと対照的に、心配性で、神経質で、家族の成功を生き甲斐にする女性であった。ベシーは、テニソンやロングフェローの詩を好んだ。信仰は、ハリーと同じ、メソジスト派である。

ハリーとベシーは一八九一年に結婚した。結婚生活は幸福なものであったという。ふたりのあいだには、翌一八九二年に、長女エニッド・メアリー (Enid Mary) が生まれ、九五年に、長男レズリー・ポウルズが生まれ、一九〇三年に次女アニー・ノーラ (Annie Nora) が生まれている。長男につけられた名レズリーは、文人レズリー・ステイーヴン (小説家ヴァージニア・ウルフの父) にちなんだものだそうである。ステイーヴンは両親の尊敬していた人物だそうだが、ふたりに文学趣味があったことは、この命名にも知られる。

これらの子供たちの育った家庭は、ピューリタンの雰囲気満ちていた。メソジスト派のピューリタニズムは、父親ハリーの場合には、「ストイックな理性主義」に傾き、母親ベシーの場合には、「他人に正しい進路を進ませるためには、自分はいかなる苦痛も忍ばねばならない」という体のものであったそうである。この家庭では、飲酒は眉をひそめられ、トランプ遊びは許されず、美的感興にふけるのも喜ばれなかった。だが、息子のレズリーは、両親のピューリタニズムを受け継ぎつつも、それから逃れようとする心を合わせ持っていたように見受けられる。

レズリー・ポウルズ・ハートリーは、丸顔の、ウェーブした髪を持つ、病弱な子供であった。当時、ピーターバラのような田舎町は社交に乏しい場所で、レズリー少年も館のなかに閉じこもりがちに育ち、心配性の母親の関心を専らにしていた。

少年時代のレズリーは、姉エニッドとともに、家庭教師から教育を受けた。その後、レズリーは、一九〇八年、サネット州クリフトンヴィル (Cliftonville, Thanet) にあった予備学校の寄宿生となった。まもなく十三歳になろうとするころである。レズリーは勤勉で真面目な生徒であったという。この学校で、中産階級出身のレズリーはじめて上流階級出身の少年たちとも知り合うことになる。このうち、レズリーは生涯、上流階級の生活ぶりに魅了され、この階級の周辺に生きるようになる。

一九一〇年、レズリーは港町ブリストル近郊のパブリック・スクール (Clifton College) に進学したが、胸部疾患の兆候が現れたので退学し、別のパブリック・スクール、ハロウ (Harrow) に進学した。レズリーは、この名門校での生活を楽しんだそうである。ハロウ時代のレズリーは主席となるほど学業に優れ、ピアノも学校のコンサートで演奏するほどの腕前で、フットボール・チームの主将も務めた。

ハロウ在学中の一九一二年、レズリーは両親の宗教であるメソジスト派を去り、英国国教に改宗している。英国社会のエリートを育てるハロウ校では、メソジスト派の生徒は全校生徒中わずか二十人ほどしかいなかったそうである。この改宗について、伝記作者ライトは、宗教的熱意から成されたものではなく、スノビズムの現れであろうという (前掲書 p. 38)。半ばはそのとおりであろう。ただし、レズリーが教会建築や聖歌の美しさに惹かれたのを取り上げて、宗教の本質でない些末な装飾に惹かれたのだとライトがいうのは、英国国教のような典礼を重視す

る宗派については正しくないだろうとわたくしは思う。

ハロウ時代のレズリーは、文学趣味も育てた。好んだ作家は、エミリー・ブロンテ、ホーソン、ヘンリー・ジェイムズであった。レズリーは、在学中に、ブロンテについては論文を、ホーソンについてはエッセイを書いている。レズリーは、その後、生涯ブロンテを愛好し、ホーソンに魅了され続けた。

一九一五年十月、レズリーは、オックスフォード大学、ベイリオル学寮に入学した。その前年には第一次世界大戦が始まっていて、入学の翌年、ハートリーも、あまり気乗りのしないまま、志願して軍隊に入った。しかし、肺と心臓の不調ゆえに、戦場に出ることなく、一九一八年九月に除隊となった。この体験の結果として、国のために働けなかった悔いと、「はみ出し者」意識とが残った様子である。

同年十月、ハートリーはオックスフォード大学に復学した。大学で、レズリーは、自分の出身階級よりも上の階級の学友たちと交際する傾向があった。そのひとりが、まもなく評論家として名を成すデイヴィッド・セシル (David Cecil, 1902-1986) で、これはソールズベリー侯爵の子息であった。在学中に、ハートリーは上流社会にも出入りし始めた。親しく交際してもらったなかに、アスキス家がある。第一次世界大戦勃発の頃首相を務めていた政治家ハーバート・ヘンリー・アスキスの一家である。

オックスフォード在学中のハートリーには、婚約とその解消という事件もあった。一旦婚約したものの、ハートリーが逡巡しているうちに、相手の女性が別の男と婚約したのである。ハートリーは、あるいは自分が結婚生活に不適かもしれないと悩んだのであったろうか。この事件の展開に関連したもののか、ハートリーはこのころ神経症に苦しんだ様子である。

やはりオックスフォード在学中の一九二三年、ハートリーははじめてヴェネツィアを訪れた。こののち、ハートリーはこのアドリア海の町をくりかえし訪れるようになるのだが、ハートリーとヴェネツィアとの関わりについては、次節でややくわしく扱うので、ここでは、これが初訪問であったことにふれるに止める。

翌一九二三年、ハートリーは、オックスフォード大学の近代史専攻を「次席優等」で卒業した。ハートリーは「優等」でなかったことに、がっかりし、過小評価されたと感じたようである。ちなみに、イーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh, 1903-66) の『ブライズヘッドふたたび Brideshead Revisited』(1945) には、ハートリーが在学していたのとはほぼ同時期のオックスフォード大学の様子が描かれている。この小説のなかでは、オックスフォードの最上級生である登場人物が、入学したての語り手に向かい、「君は歴史を専攻しているのだね。たいへん良い科目だ。いちばん駄目なのが英文学、つぎに駄目なのが哲学・政治学・経済学だ。しかし、優等か可のどちらかを取るのだよ。その中間の成績には価値がない」、¹⁾ といっているのが思い出される。ハートリーは、良好な専攻を、無価値な成績で卒業したわけである。

ハートリーは、オックスフォード大学在学中に文筆活動を開始したが、その側面については、後段でまとめて扱うことにして、この人物の生涯で、いくつか気になる点にふれておきたい。

ひとつは、ハートリーは心身ともに健康でなかったということである。中等学校時代のハートリーがフットボールの選手として活躍したのは例外的なことで、幼少年期のハートリーには呼吸器疾患があり、成人してからのハートリーは心臓が不調で、中年以降は高血圧症に苦しんだ。死の床についたのも、心臓発作が原因であった。また中

年以後のハートリーは極度に肥満し、「洋梨型」の体軀と称されるようになる。肥満の主たる原因は、過度の飲酒と運動不足であった。晩年のハートリーは、朝から一日中飲酒（特にジン）をする状態になっていた。一九七一年、『スペクテイター』誌の短編小説コンテストの審査をしたときのハートリーは、昼前から多量の酒を飲み続け、同席した文芸部記者の回想によれば、「大きな赤い顎をして、よだれを垂らした。下唇からよだれを垂らすのを自分で止めることができなかった」²¹そうである。アルコール依存症であったのだろう。

ハートリーは、精神的にも不安定なところのある人であったらしい。すでに婚約解消事件に関連して、神経症を経験したことにふれたが、ハートリーはのちに六十歳の頃にも神経症に悩み、精神分析医の治療を受けることを考へ、友人に止められたという。おそらくは深酒もまた、不安定な精神状態を麻痺させようとしたもので、かえって、それを悪化させる原因となったのではなかっただろうか。

自分自身が同性愛者であるらしい伝記作者ライトは、ハートリーは同性愛者であったと断定している。ライトの断定は、自らの嗅覚に基づくものであるから、真実を突いているのかもしれない。晩年のハートリー自身もそういう性癖を他人にほめかしたこともあったらしい。いずれにしても、ハートリーは終生独身であった。

ハートリーが同性愛者であったとすればなおのことであるし、仮にそうでなかったとしても、独身生活を送ったということだけで、ハートリーの精神にはひとつの葛藤が生じたにちがいない。それというのも、書き物から判断するなら、ハートリーはあきらかに保守的な考えの持ち主であったし、ピューリタンの思想や倫理観を（国教会への改宗後も）捨てきれなかったように感じられるからである。ハートリーは、本来なら、通常の家庭生活を営み、独身生活や同性愛を糾弾する側に立ちたかったはずである。ところが、望まずして、自分を少数派で、はみ出し者

の位置に置かざるを得なくなった。皮肉なことである。ハートリーが、生まれ育った英国に違和感を感じていたことは、おそらくその性癖や生活形式に深く関わっていたであろう。しかしまた、こういう心中の葛藤や違和感が小説家ハートリーを生み出したという側面も忘れてはなるまい。

ハートリーは大学卒業後、壮年時代は、一年の半分をヴェネツィアに住まうほかは、両親の家フレトン・タワーや、友人の家に転々と滞在した。そして遅ればせに四十代半ばから、自分の家に住まうようになったのである。ハートリーは四十四歳のときにソールズベリー市内の、川沿いの家を借り、ついでデイヴィッド・セシル夫妻の留守宅に仮住まいをした後、五十三歳の時から、バース市に近い村バースフォードに邸宅を購入して移り、晩年にはロンドン市内にフラットも所有した。バースフォードの家は、エイヴォン川に沿う庭付きの、のちにはホテルに改装されるほどの規模の邸宅であった。ハートリーはそこに使用人たちと住まったのである。しかし、ハートリーと交遊のあった評論家ウォルター・アレン (Walter Allen, 1911-95) は、この家はあまり生活感がなく、ハートリーの孤独さが印象的であった、と回想している。³ 家は構えていても、ハートリーは、妻子がいなかったために家庭がなく、英国の社会への所属も希薄であり、そのことは鋭敏なハートリー自身が自覚していたであろう。

ハートリーは、上流階級の生活形態にあこがれ、その階級の人たちとの交際を求めた。交際は多くの場合、許されたようだが、それは上流階級の一員になったということではなく、ハートリーはその周辺に留まった。これは上流階級の長所も短所も見えやすい視角を得たということである。だがまた、ハートリーは、上流階級とその生活形態とが確固としていた時期の英国に愛着し、社会改革と福祉国家化が進んで、(ハートリーの見方では) 下層階級の墮落が進行してゆくのを嫌悪した。そうして、しだいに英国社会への違和感を募らせていったようである。

家族との関係について見ると、ハートリーは、実業家であった父親の期待に反して、文学という虚業の世界に入ったことについて、肩身の狭さを感じ続けていたらしい。父親は文学を生業にするのを容認してくれたようだが、それにもかかわらず、ハートリーの一種の罪悪感は持続したようである。しかも、その父親は強健で、一九五四年、九十四歳まで生き、最晩年まで煉瓦会社の経営に従事していた。ハートリー自身は父親が死去した年、すでに六十歳間近であった。また、のちに見るとおり、ハートリーが文筆で自立できたのはひじょうに遅く、五十歳頃のこと、それまでは実質的に父親の資産に寄生していたのであるから、肩身の狭さはなおさらであったろう。

母親は、すでにふれたように、家族のことを過剰に心配し、家族の成功を望む女性で、子供に対しては過保護に傾いた。ハートリーが結婚をし、子供を作って、一家を形成しなかったこともおそらく原因となり、母親は、いつまでもハートリーと同居したがった。それをハートリーはありがたく思いつつ、疎ましく感じ続けた様子である。しかも、母親もわりあい長寿で、ハートリーが五十歳近くなるまで存命であった。

長姉は自我と指導欲の強い女性であったらしく、自我が弱くて、他人の意思を尊重しがちなハートリーには、半ば必要でありながら、敬遠したくなる存在であったらしい。この姉がハートリー同様に独身であったために、独身の弟ハートリーにその強力な意志が向かう傾きがあった。この姉は、終生、父母の家に同居し、一九六七年、ハートリーの最晩年まで生きていた。ハートリーには、こういう父・母・姉と、彼らの住む家フレトン・タワーから逃れよう、できるだけ近寄るまい、とする行動が見られる。

ハートリーの交友関係では、すでにふれたように、上流階級の人たちとの交遊が目立つ。男の友人たちのなかで、とりわけ重要な意味を持ったのが評論家として名高いデイヴィッド・セシルである。セシルはハートリーよりもや

や年少で、大学時代に出会い、親友となった人物である。伝記作家ライトの推測によれば、ハートリーのセシルに對する感情は同性愛であり、したがって、セシルが婚約したのは、ハートリーにとって裏切り行為と感ぜられ、ハートリーはセシルを生涯許すことができなかった、のだそうである（前掲書 pp. 98-100）。ただし、わたくしには真偽の判定はできかねる。いずれにしても、ハートリーは、デイヴィッド・セシルの結婚式では付添を務め、二人の間にできた子供の代父もつとめたし、セシル夫妻の留守宅を借りていたこともある。長編小説家ハートリーとしての処女作 *Simonetta Perkins* (1925) はセシルに献呈されたし、ハートリーは終生、自分の書きものの善し悪しをセシルに判断してもらうのが常であった。一方、小説家としてのハートリーの美点を世に喧伝したのもセシルであったし、ハートリーの葬儀で弔辞を述べたのもセシルであった。

ハートリーには女性の友人も多かったが、とりわけ重要なのが、七十歳間近で知り合ったジョウン・ホール (Joan Hall) である。ジョウンは文学好きの主婦で、知性に優れ、読書家で、ユーモアのセンスがあり、よい友人となったのだが、そればかりでなく、作家としてのハートリーに重要な役目を果たした。ハートリーはタイプができなかったが、ジョウンはタイプが上手であった。しかも、まもなく、ジョウンはハートリーの浄書役に留まらず、草稿の判読をゆだねられ、さらには、最終原稿に纏め上げる役割もゆだねられるようになる。つまり、ジョウンはハートリー作品の一種の校訂者になったのである。なお、ジョウンのハートリーへの気持ちは友情を超えるものであったらしいが、ハートリーはそこまで踏み出さなかったようである。

ハートリーは、作品のなかで、くりかえし少年期のトラウマを描いた。作品に描かれる、少年の心に深い傷を負わせた事件そのものは作品によって異なるし、あまり説得力がないように感じられる場合もある。しかし、ハート

リーがトラウマ体験を取り上げる執拗さを見れば、伝記作者ライトのように、ハートリー自身にトラウマ体験があったと推測したくなって当然である（前掲書 p. 253; pp. 213-14）。仮にライトのいうようにハートリーが同性愛者であったとすれば、そのことを自覚した、あるいは自覚させられたことがトラウマとなったのであろうか。

ハートリーは、自分ではラジオのスイッチを入れることもできない人であったという。そして配偶者もいなかった。したがって、生活していくための助けは、すべて使用人から得るしかなかった。ところが、ハートリーは使用人を雇い入れる場合に、信用のおける紹介業者を介さず、『タイムズ』誌に求人広告を載せ、みずから面接をして採用した。このようにして最初に雇った使用人頭は頼れる人物であったものの、使用人のあいだではトラブルが絶えなかった。しかも、ハートリーはのちには精神異常者や犯罪者を雇って、被害を被ることもあったのである。ただし、ハートリーは、みずから、使用人に尋常でない人間たちを求めていた様子も窺える。それに、ウォルター・アレンの回想によれば、ハートリーはいかにも「カモ」のように見えてしまう人で、使用人たちからだけでなく、ほかにもさまざまな人たちの犠牲になったのだそうである¹¹。

ハートリーの文筆活動はどういうものだったか。ハートリーの文筆活動の開始は早く、オックスフォード大学在学中からであった。『オックスフォード・アウトLOOK』誌の副編集長として編集に当たるかたわら、書評や短編小説をこの雑誌に掲載したのである。この雑誌に発表した短編数編はまもなく初短編集『夜の怪Night Fears』（1924）に収録されることになる。

大学卒業後、ハートリーが長年携わった文筆活動は書評の執筆であった。『スペクテイター』、『スケッチ』、『サ

タデー・レヴュー』、『ウィークエンド・レヴュー』、『オブザーバー』といった新聞雑誌に、新刊小説の書評を書いたのである。一九二九年、『スケッチ』誌に書評を書き始めるころには、「高名な文芸批評家」で、「現在の英国で、小説については最高の批評家」と紹介されるようになっていた。⁵⁾「はじめに」でふれたMichael Alexanderの英文学史が、書評家としてハートリーを取り上げていたのは、じつは、それなりの根拠があったわけである。ハートリーは、二十数年間にわたり、およそ六千冊を超える本を書評しただろうと回想している。毎週平均五冊を書評したのだそうである。伝記作者ライトは、小説家ヒュー・ウォルポール (Hugh Walpole, 1884-1941) がハートリーに宛てた言葉、「わたくしの知るかぎり、賢明で、親切でもある唯一の批評家」などを引きながら、ハートリーが判断と理解にすぐれた書評家であったと述べている。⁶⁾おそらくは、六千冊という数の執筆依頼があったこと自体が、全般的には、ハートリーの綴った書評の水準の高さを証明しているに違いない。しかしその一方で、ハートリーの小説を高く評価し、友人ともなったウォルター・アレンが、そうなるまえに、自分の出版した二、三の小説をハートリーによって、「あまり同情心も洞察力も見られない書評をされていた」と書いていることにも注意して良いだろう。⁷⁾一週間に五冊も書評すれば、質にはらつきが生じて当然だからである。ハートリーがこれほど多数の書評を長年書き続けた背景には、依頼を断れない性格のほかに、文筆に従事している自尊心を満足させる気持ちもあったようである。また、書評をすることから学べる点も少なくなかったであろうが、他方には弊害もあって、ハートリーはのちには本を読む喜びを失い、創作に欠かせない想像力の減退も招いたようである。

作家としてのハートリーが世間で評価されたのは、文芸批評家として知られたときよりもはるかにのち、第二次世界大戦が終わった頃からである。ハートリーは、すでに四十九歳になっていた。そのときまでに、ハートリー

は、短編集『夜の怪』(1924)・中編小説 *Simonetta Perkins* (1925)・短編集『毒瓶 *The Killing Bottle*』(1932)・最初の長編小説 *The Shrimp and the Anemone* (1944) を出版していた。このなかで *Simonetta Perkins* にいては、『サタデー・レビュー』誌が「過去二、三年で読書界に登場した、もつとも期待される、才能豊かな新人のひとり」と評してくれたが、本は売れず、ハートリーは十二ポンドを手にしただけであった。売れ行きが悪かったのは、ふたつの短編集についても同様であった。ところが、長編小説 *The Shrimp and the Anemone* の評判は良く、売れ行きも悪くなくて、一九四五年に再版されたのである。これは、*The Sixth Heaven* (1946)・*Eustace and Hilda* (1947) とあわせて三部作を形成するものであった。この三部作は、気弱で虚弱で他人の氣に入られるのを好むユスタスと、性格が強くて干渉癖のある姉ヒルダとの関係を、少年少女期から成人後へ、ユスタスの自己犠牲による死に至るまで辿つてゆく。この作品について、ウォルター・アレンは『ニュー・ステイツマン』誌上で、「ハートリー氏の三部作は、わたくしの見るところ、現代小説のなかの、ごく少数の傑作のひとつである」と評し、『タイムズ文芸付録』も、「ユスタスの三部作で、ハートリー氏は、この国で近年出版された最高の小説を生み出した」と評した。

これより先、一九四五年に、ハートリーは出版社パトナム社から、一九四七年末までに、右の三部作に続いてもう一冊小説を書くなら、月々六〇ポンドの前渡し金を受け取る、との約束を得ていた。ハートリーは、このときから小説家としての生活に入ったと見て良いだろう。

プロフェッショナルな小説家としてのハートリーの出発点が *Eustace and Hilda* 三部作であったとすれば、ハートリーを有名小説家にしたのが一九五三年出版の *The Go-Between* であった。この小説は、少年時代に、上流の

令嬢とその使用人とのあいだで、恋の取り持ち役をつとめさせられ、心に傷を負った人物の思い出話である。デイヴィッド・セシルは、『タイムズ文芸付録』誌上でこの小説を「完成度の極めて高い作品で、ねらいを正確に達成しているから、ほとんど説明を要しない。読んで賛美すればよいだけである」と絶賛した。¹⁰⁾ 出版社（ハミルトン社）側では、初年度の売り上げを十萬部と見込んでいたのが、五萬部に達しなかったのがっかりしたというが、それにしてもよく売れたことに変わりはない。この作品はハイネマン文学賞を受賞したし、出版後まもなく、仏語、伊語、蘭語、ノルウェー語、フィンランド語に訳された。一九五五年に日本語訳（露澤忠枝訳）も出版されたのは、「まえがき」でふれたとおりである。この一九五五年に、ハートリーが王立文学協会の特別会員に選ばれたり、翌一九五六年に大英帝国第三等勳爵士を授けられたのも、この作品によって有名作家となったのが機縁であろう。こののち、ハートリーは、英国国内ばかりでなく、ドイツやイタリアで公演旅行をしたり、ラジオやテレビで話をしたりするようになるし、一九六六年には、国際ペンクラブ英国支部の会長に選ばれる。文筆界の名士になったのである。

ちなみに、*The Go-Between* は出版当初から映画化の話があつたが、なかなか実現せず、実際に映画化されたのは一九七〇年になってからであった。映画はハロルド・ピンター (Harold Pinter, 1909-84) の脚本で、ジョウゼフ・ロウジー (Joseph Losey, 1909-84) 監督により、ノーフォーク州でロケーション撮影された。ハートリーは妹ノーラへの手紙に、「それが起こった邸ではないのですが、イースト・ディアラムの近くで撮られることになりました」と書き送った。¹¹⁾ 小説中の出来事がながしかの事実に基づいていることを窺わせる言葉である。試写会でハートリーは心の動揺を見せたという。映画の出来は上々だったが、収益は上がらなかったそうである。

以下、ハートリーの著作一覧を掲げておく。個々の作品の内容については、次回・次々回の拙文でふれることもあるだろう。ちなみに、笠原勝郎編『最新イギリス文学史年表——翻訳書・研究書列記』（こびあん書房、1995）も、L. P. Hartleyの項目については、出版作品の半数程度しか拾っていないから、以下の目録にも意味があるかもしれない。

- Night Fears and Other Stories* (Putnam, 1924) 短編集
Simonetta Perkins (Putnam, 1925) 中編小説
The Killing Bottle (Putnam, 1932) 短編集
The Shrimp and the Anemone (Putnam, 1944) 長編小説
The Sixth Heaven (Putnam, 1946) 長編小説
Eustace and Hilda (Putnam, 1947) 長編小説
The Boat (Putnam, 1949) 長編小説
The Travelling Grave (Barrie, 1951) 短編集
My Fellow Devils (Barrie, 1951) 長編小説
The Go-Between (Hamish Hamilton, 1953) 長編小説
The White Wand and Other Stories (Hamish Hamilton, 1954) 短編集（表題作は中編小説）
A Perfect Woman (Hamish Hamilton, 1955) 長編小説

- The Hiring* (Hamish Hamilton, 1957) 長編小説
- Facial Justice* (Hamish Hamilton, 1960) 長編小説
- Two for the River* (Hamish Hamilton, 1961) 短編集
- The Brickfield* (Hamish Hamilton, 1964) 長編小説
- The Betrayal* (Hamish Hamilton, 1966) 長編小説
- The Novelist's Responsibility: Lectures and Essays* (Hamish Hamilton, 1967) 評論集
- The Collected Short Stories of L. P. Hartley* (Hamish Hamilton, 1968) 短編集
- Poor Clare* (Hamish Hamilton, 1968) 長編小説
- The Love-Adept* (Hamish Hamilton, 1969) 長編小説
- My Sister's Keeper* (Hamish Hamilton, 1970) 長編小説
- The Harness Room* (Hamish Hamilton, 1971) 長編小説
- Mrs Carteret Receives and Other Stories* (Hamish Hamilton, 1971) 短編集 (表題作は中編小説)
- The Collections* (Hamish Hamilton, 1972) 長編小説
- The Will and the Way* (Hamish Hamilton, 1973) 長編小説
- The Complete Short Stories of L. P. Hartley* (Hamish Hamilton, 1973) 短編集

二 ヴェネツィアのハートリー

ヴェネツィアは近代のヨーロッパ人にとって、近代日本人にとっての京都と似た意味を持った都市であつたらう。この都市は、十九世紀以降、ヨーロッパが急速に近代化を進めるなかにあつて、近代以前のヨーロッパ都市の形態をほぼそのままに残して「心のふるさと」化し、その一方で、十九世紀後半以後の鉄道網の発達により、訪れるのが容易になつたからである。

十九世紀後半以後のヨーロッパの上流階級や上層中産階級の人たちにとって、生涯に何度かこの町を訪れるのは、ごく普通のことであつた。文学者たちも、多くはそれらの階級に属していたから、やはり普通にそうしたのである。ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916)、『プルースト (Marcel Proust, 1871-1922)』トーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955)、『イーヴリン・ウォー (1903-66)』などは、いずれもそのようにした文学者である。また一方には、この町に魅せられ、住み着いてしまふ人たちもあつた。文筆の世界でいえば、コルヴォー男爵と自称した小説家フレデリック・ロルフ (Frederick Rolfe, 1860-1913) や歴史家ホレイシオ・ブラウン (Horatio Brown, 1853-1926) のような人たちが、それである。

しかし、L・P・ハートリーのヴェネツィアとの関わり方は、そのいずれとも異なる中間的なものであつた。ハートリーは、壮年期の十二年間にわたり、毎年、春と秋に、この町を訪れ、滞在を繰り返したのである。その行動様式は、フランスの詩人・小説家アンリ・ド・レニエ (Henri de Régnier, 1864-1936) に酷似している。ハートリーは、ヴェネツィアのとらえ方についても、多くの作品の題材をヴェネツィアから得た点でも、レニエに類似しているが、この側面については、のちにふれる機会があるだろう。

ハートリーがはじめてヴェネツィアを訪れたのは、一九二二年九月、二十七歳のときである。ハートリーはまだオックスフォード在学中であった。友人クリフォード・キッチン（Clifford Kitchen, 1895-1967. のちの小説家）から旅を誘われ、あまり乗り気ではなかったが、従ったらしい。しかし、はじめて体験するヴェネツィアは、予想に反して快い場所であつたらしい。ハートリーは現地から母親に宛てた手紙に、こう書いている。

ここはじつに心地の良いところです……。これまで毎日、日が降り注いでいて、ぼくは、世界中できっと一番安全な浜辺で水浴をしました。リドという場所です。……この町は、およそ骨折りとは無縁の場所です。ゴンドラは気持ちをしめてくれますし、それに乗ってどこかへ行くのは、時間はかかるけれど、丸太を滑り降りるように楽です。¹²²

神経症に悩んでいたハートリーにとって、「気持ちを和らげてくれる」この町は、ありがたいものであつたに違いない。しかも、「ここはじつに心地よいところです」という認識はまた、ハートリーがこの町の重要な本質を即座につかみ取つたということでもあつただらう。それは、フランス人のヴェネツィア通レニエが、初訪問のこの町から感じ取つたものと、まったく同じだったのである。レニエはのちに随想集『アルターナ——ヴェネツィア暮らし』*Altana ou la Vie vénitienne* (1928) に、つぎのように書く。

ヴェネツィアは、並外れた心地よさで包み込んでくれるから、人は、すぐに、穏やかな幸福感——友好的な

くつろぎ、控えめな喜び、優しい感謝の気持ち——のなかで、生きるようになる。¹³⁾

ハートリーはまた、この町に、心地よさだけでなく、強烈な生と死の対照を見て取った。ハートリーは中編小説 *The White Wand* の語り手に、こういわせている。

ヴェネツィアではときどき起こることでありますが、このときも、死の観念がわたしに付きまといました。教会、鐘の音、美しさ、ヴェネツィア人の圧倒的な元気さ、これは、どれをとっても、感覚が人に与えてくれるもの、つまり、生を強調しているでしょう。しかし、そういう生を受け入れることができないとなれば、それは正反対の、死しか残っていません。北の国々には、さまざまな度合いの生があるのです。でも、イタリアはコントラストの国で、中間的色調の国ではありません。¹⁴⁾

これは、トーマス・マン『ヴェニスに死す *Der Tod in Venedig*』(1912) に典型的にみられるような、ヴェネツィアを死に取り憑かれている町、そしてそこを訪れる人を死に引き込む町、とみる捉え方を包含しつつ、同時にそれを超えているともいえそうな認識である。

なお、ハートリーのさきほどの手紙のなかに「リド」とあったのは、ヴェネツィアの潟湖をアドリア海から隔ている細長い砂州の島のことである。この島のアドリア海側の浜辺には、十九世紀後半から海水浴施設がつくられ、さらに二十世紀転換期には豪華なりゾートホテルも建てられて、のちにヴィスコンティ (Luchino Visconti, 1906-

1976) 監督の映画『ベニスに死す *Morte a Venezia*』(1971) に再現されるような、上流階級の国際的保養地・社交場となっていたものである。

さて、ハートリーは、一九二四年にも、一九二五年にもヴェネツィアを訪れたが、一九二七年九月にヴェネツィアを訪れたときからは、ホテルでなく、普通の邸の数部屋を借りて住まうようになった。聖セバスティアアーノ河岸にあるその家 (San Sebastiano 2542番地) は今も残っている。間口のあまり広くない家だが、ヴェネツィアの家屋は一般に、京都の町屋と似て奥行きが深いので、おそらくはこれもけっして小さな家ではあるまい。家の正面は全体に古び、二階は円形アーチ窓が四つ連なって、中央にバルコニーがついている。外観はさして豪華なものではないが、ヴェネツィアの家は、外観からは予想できないほど内装が豪華であることが少なくないから、この家もそうであったのではないか。

聖セバスティアアーノ河岸は、幅広いジュヅッカ運河に南面する土手路フォンダメンテ・ザツテレを西端まで歩いて、北に曲がり、「風の小路」という名の路地を抜け、小運河沿いに百メートルほど歩いたところにある。この地区は、ヴェネツィアのなかでも、聖マルコ広場やリアルト橋あたりとは異なり、ほとんど地元の人たちしかいない、静かなところである。聖セバスティアアーノ河岸の名は、小運河を跨ぐ小橋を渡ったところに聖セバスティアアーノ (セバスティアヌス) 教会があるところから、付けられたものである。ハートリーは、滞在している家のバルコニーから、教会の正面に据えられた、矢で射られて殉教する聖人セバスティアヌスの像を眺めることができた。

ハートリーの滞在したこの家は、ヴァン・デル・フーヴェンという名の夫人の所有するものであった。夫人はロシア人で、オランダ人男爵の寡婦であった。ヴェネツィアは、十八世紀末に共和国が崩壊して以来、長期にわたる

異民族統治と経済不況とを経験するなかで、多数の館や家が裕福な外国人の所有物となった。ヴェネツィアはその意味でも国際色豊かな町であったのだが、この聖セバスティアアーノ河岸の家も、同様の経過をたどっていたものだろう。ハートリーは、この家の数室を借りたのである。

ハートリーは、こののち、毎年、春と秋にヴェネツィアのこの家にやってきて、春秋それぞれ三ヶ月ずつを過ごした。一年の半分は、ここに滞在するようになったのである。ハートリーはヴェネツィア以外では、このころまだ自分の家を持たず、両親の家や、友人の家を転々として過ごしていたから、セバスティアアーノ河岸のこの家が事実上の本拠であったといえる。ハートリーは、この家で、書評の原稿と、長編・短編の小説とを書いた。代表作 *The Go-Between* もこの家で執筆されたものである。この家はまた、英国の友人・知人たちと交友する場にもなった。デイヴィッド・セシルをはじめとする母国の友人・知人が訪れたり、滞在したりする場所になったのである。

ハートリーが新たにヴェネツィアで知り合って親交を結んだ人たちのなかにバークレー伯爵夫人モリーがある。モリー・バークレー、小説 *A Perfect Woman* の献辞に名を記される女性である。バークレー夫妻のヴェネツィアでの家は、バルビの館であった。これは、この町の日抜き通りである大運河に面した豪華な館で、今はヴェネト州庁舎のおかれている建物である。ハートリーが小説 *Eustace and Hilda* で主人公の滞在する館のモデルのひとつにしたのは、おそらく、このバルビの館であろう。

ハートリーは、ヴェネツィアでも活発な社交をおこなった。この町には、以前から、母国を捨てたり、半ば捨てたりして住み着いた富裕な英米人のつくるコミュニティがあった。この集団は、彼らだけで一種の貴族社会を形成していて、リドで水浴をしてホテルに泊まるような同国人たちを軽蔑していた。バークレー夫妻もこの貴族社会

の一角をなしていたのである。

ハートリーがヴェネツィア暮らしをしたころ、このコミュニティーに君臨していたのは、ジョンストン夫妻であった。米国出身の人たちである。ジョンストン夫人（ニューヨーク出身の富裕なユダヤ女性であった）は、のちにハートリーの中編小説 *Mrs. Carteret Receives* の女主人公のモデルとなる人である。この夫妻は、北方の潟に面した、広い庭のある、豪華な館（コンタリーニ・ダル・ザッフォの館）に住まい、ヴェネツィアに居住・滞在・訪問する人たちをコミュニティーに受け入れるかどうか、きびしく吟味していた。たとえば、愛人のダンサーを連れてヴェネツィアを訪れた東洋学者アーサー・ウェイリー（Arthur Waley, 1889-1966）のような人は、受け入れを拒否されたのである。

ハートリーはジョンストン夫妻に受け入れてもらえたが、ハートリーがヴェネツィアで交際をしたのは、基本的にこの英米人コミュニティーの人たちである。ヴェネツィア人上流階級は、この英米人集団を本質的には受け入れていなかったため、ハートリーの交際範囲もまた、基本的には英米人社会に限られたのである。この町には、主に英米人のための教会として、英国国教会の聖ジョージ教会があるが、ハートリーも、滞在中は、ジョンストン夫妻などとともに、そこへ通った。

ヴェネツィアに滞在するときハートリーは専用のゴンドラと船頭とを雇っていた。ハートリーは、このゴンドラで潟に出かけるのを無上の喜びとし、自らもまた、楽しみのために權を操ることが多かった。ハートリーの短編中、本邦で初めて紹介された「ポドロ島」も、ヴェネツィア周辺の潟で、ゴンドラを乗り回した体験を背景にしたものであった。

こうして、一年の半ばをヴェネツィアで過ごす生活は、一九三九年、英伊が交戦を開始するまで続いた。ハートリー、四十四歳である。ハートリーが英国に家を構えたのは、これ以後のことである。

ヴェネツィアでこういう暮らし方をしている十数年のあいだに、本質的に時の止っている町ヴェネツィアにも多少の変化は生じていた。聖セバスティアアーノ河岸の家の前の小運河はモーターボート専用路となり、ゴンドラを横付けできなくなってしまった。ジョンストン夫人も亡くなり、英米人コミュニティは指導者を失った。しかし、ヴェネツィアはハートリーにとって「わたしの思いが向かってしまう場所、わたしの根がいちばん深く降りている場所」であった。¹⁵¹

ヴェネツィアがハートリーにとって居心地の良い場所であった理由のひとつに、現地で接するヴェネツィア人とりわけ使用人たちを気に入っていたこともあったようである。ハートリーは手紙にこう書いている。

英国の村の生活で得られそうな個人的なさまざまな事については、ヴェネツィアでじゅうぶん¹⁵²に得ていると思います。彼らヴェネツィア人たちは、人に大きな関心を抱きますから、それを返すのも簡単、ずっと簡単です。階級の区別の強いここ英国よりも簡単だ¹⁵³と思います。

第二次世界大戦も終わった一九四七年、五十二歳のハートリーは、八年ぶりにヴェネツィアを訪れた。大戦によって英国社会が大きく変貌したのを嫌悪していたハートリーはヴェネツィアも変わってしまったのではないかと怖れていたが、予想していたほどではなかったらしい。現地から出した手紙のなかで、ハートリーは万事が「楽

しい」と書き、「友人は少々、いや、たぶん大いにといった方がよさそうに、欠けてしまいました。大歓迎な様子の顔が至る所に見られます」と書いた¹⁷⁷。もつとも、聖セバステイアーノ河岸の家では、老男爵夫人が歓迎している様子を見せたものの、ハートリーには、外の見えない寝室と食堂の二間しか貸してくれなかった。

男爵夫人に冷たくあしらわれたせいだろうか、一九四九年以後、五三年まで、ハートリーは、ヴェネツィアに滞在するときには、聖セバステイアーノ河岸を離れ、聖トロヴァーゾ地区にあるボンリーニの館のアパートメントを借りた。聖トロヴァーゾ地区といえは、これもザツテレ河岸に近いが、セバステイアーノ河岸よりもアカデミア美術館にずっと近寄った場所である。あいにくのことながら、この家主である女性とハートリーはうまくゆかなかつたらしい。

一九五四年にヴェネツィアを訪れたときには、ハートリーはホテルに滞在している。ハートリーも高齢（五十九歳）になり、外国に片足を置く生活は苦痛になってきたということだろう。それには、このころには、ヴェネツィア愛好家のハートリーも、この町に食傷していた様子がみえる。一九五八年、講演旅行で訪れたハートリーを、ヴェネツィアの聴衆は「熱烈に歓迎してくれたといえそう」であったのだ¹⁸⁷。

しかし、一九七二年、死も間近い床のなかでハートリーがなつかしく思い出していたのは、昔慣れ親しんだヴェネツィアのことであった。死の二ヶ月前、親友ジョウン・ホールに宛てた手紙には、こう書かれている。

「ヴェネツィアを非難したくなるのも」じつはこちらの精神状態のせいです。いつもひじょうに幸せな状態ではないわけで。エリザベス・ボウエンが、橋のひとつから身を乗り出していたら、眼から涙があふれ出たわ、

なぜだかわからなかったけれど、と昔いったことがあります。そうなるのは、あれほど完璧な光景を見ると、何も付け加えることができないし、何を取り去ることもできないからでしょう。ヴェネツィアを離れるときには、わたしも昔は激しいノスタルジアを感じたものですが、その気持ちもしだいに失せ、最後に去ったときには、立ち去るのをありがたく思ったものです。暑熱が濡れた大きな毛布のように降りかかっていましたからね。でも、そのときにはわたしもすっかり年をとっていました。ヴェネツィアから得られるものは、それまでに得ていたのです。¹⁹⁾

おわりに

今回の拙稿では、おそらくは本邦であまりよく知られぬままの作家L・P・ハートリーについて、履歴を概観したうえで、都市ヴェネツィアとの関わり方を瞥見してみた。ハートリーの履歴との関わりでヴェネツィアを見る場合、重要なポイントはつぎのようなものであろうと思う。

第一に、この作家が、壮年期の十数年間、ヴェネツィアを事実上の本拠として過ごした関わりの深さに、注目すべきであろう。

第二に、ハートリーがヴェネツィアに心地よさを感じ取るとともに、生と死の強いコントラストを捉えている点に注目すべきであろう。

第三に、ハートリーにとって、ヴェネツィアが、英国社会への違和感と、父母姉への疎ましきという二つのものから逃れる避難所になっていた点に注目すべきであろう。(この稿続く)

- (1) Evelyn Waugh, *Brideshead Revisited*, London: Chapman & Hall, 1945; 1960, p. 34.
- (2) Christopher Hudson, quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 261.
- (3) Walter Allen, *As I Walked Down New Grub Street: Memories of a Writing Life*, Chicago: University of Chicago Pr., 1981, p. 161.
- (4) Allen, *As I Walked Down New Grub Street*, p. 163.
- (5) Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 78
- (6) Wright, *Foreign Country*, pp. 78-9
- (7) Allen, *As I Walked Down New Grub Street*, p. 159.
- (8) Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 85.
- (9) Quoted in Wright, *Foreign Country*, pp. 145-46.
- (10) Quoted in Wright, *Foreign Country*, pp. 171-72.
- (11) Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 253.
- (12) Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 73.
- (13) Henri de Régnier, *La Vie vénitienne*, Paris: Mercure de France, 1963; 1986, p. 20.
- (14) L. P. Hartley, *The White Wand*, in *The Complete Short Stories of L. P. Hartley*, New York: Beaufort Books, 1986, p. 290.
- (15) Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 109.
- (16) Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 109.
- (17) Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 144.
- (18) Wright, *Foreign Country*, p. 198.
- (19) Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 267.